中世曹洞宗における『宏智録』の受容

――通幻派の語録・抄物を中心として――

龍谷孝道

はじめに

曹洞宗が全国規模に教線を伸張し、現在まで続く一大教団として成立し得たのは、周知の如く南北朝・室町期から戦国期にかけて活動した禅僧達の力によるところが大きい。そこで中心となったのは、峨山韶碩（一二七六～一三六六、以下韶碩）門下五哲のうち、普蔵院開基太源宗真（一三七〇寂）を祖とする太源派と、妙高庵開基通幻寂霊（一三二二～一三九一、以下寂霊）を祖とする通幻派である。

この二派の門流に属する寺院には、抄物文献が多く所蔵されており、これによって南北朝・室町期以降の曹洞宗教団の教学を知ることができる。この抄物に対する研究の進展によって、暗黒時代とされてきた当時の曹洞禅僧の教学や学人接化の実態が明らかになってきている。[1]

本論では、二大門派の一翼を担った寂霊とその門弟達に関する語録・抄物を用いて、初期通幻派の思想・宗風が如何なるものであったかを考察し、そこに見える『宏智録』を中心とした中国曹洞禅の受容状況を明らかにしたい。

通幻派の語録・抄物

寂霊は周知の如く、韶碩に参じてその法を嗣ぎ、能登總持寺に三住（一説には四住）して峨山門派の礎を築いた。更に加賀聖興寺、丹波永沢寺、越前龍泉寺などを開創し、「十哲」とも称される多くの門弟を育成した。その中でも、通幻派の教線拡大の中心となったのは、相模最乗寺を開創した了庵慧明（一三三七～一四一一、以下慧明）を祖とする了庵派である。了庵派では上堂・小参にかわって代語による朝参という提唱方法が学人接化の中心となり、[2]その提唱記録も伝統的な語録から代語集へと変化した。[3]

朝参と代語集の起源は、先行研究で既に寂霊や慧明に求められることが指摘されている。[4]寂霊の代語集は現存していな

いが、慧明には寛永十年（一六三三）に上総真如寺の尭拶によって書写された『大雄山最乗禅寺御開山御代』（最乗寺所蔵、以下『了庵代』）という代語集が現存しており、慧明が代語による提唱を行っていたことが裏付けられる。

この代語の影響は慧明の法嗣である無極慧徹（一三五〇～一四三〇、以下慧徹）にも見られる。慧徹の提唱録としては、従来『補陀開山無極禅師語録』（以下『無極録』）のみが知られていたが、他にも「無極大和尚節之御参」（以下「無極代」）・「小参無極大和尚下語」（以下「無極下語」）という二種の代語集が存在することが近年明らかにされた[5]。

この二書は、共に上野雙林寺に所蔵される『無極和尚小参下語』[6]という典籍に合綴されている。「無極代」は寛永三年（一六二六）に上野龍海院にて書写されたものであり、「無極下語」は下野大中寺にて上野陽雲寺一二世了難宗悟によって寛永年間頃に書写されたものと推定できる。

慧徹の門流は関東を中心に広がりを見せたが、慧徹以後、ほとんどが代語による説示を行い、これを学人接化の中心に据えていった。

ところで、抄物は石川力山氏によって、「語録抄」、「代語」、「代語抄・再吟」、「門参」、「切紙」という五種に分類されている[7]。これらのうち、語録抄は語録に準ずる中世曹洞禅僧の提唱録として位置づけられており[8]、上述の如く代語集も語録としての意義を持つ提唱録である。語録抄や代語集は、門参や切紙のような秘伝性を有する室内参禅の記録とは違い、公の場における複数の学人を対象とした提唱の記録である。従って、一般的な語録と連続性を有するものとして位置づけられる。

但し、従来の中世曹洞宗史研究においては、語録や僧伝資料に比して、未だ抄物は充分に活用されているとは言い難い。その理由として、抄物に存する書誌的問題や、思想内容に関する問題など、種々の点が挙げられる。

しかし、曹洞宗の展開期における宗風・思想を明らかにするためには、このような問題を越えて抄物から得られる知見を活用することが不可欠であると考える。

語録と抄物の書誌的問題―慧徹の提唱録を例として―

現存する抄物の多くは戦国期以降に書写されたものが多い。室町期初頭に活躍した禅僧達に関する記録の場合、実際の活動時期とかなり隔たりがあるため、信憑性が大きな問題となる。上述の代語集で言えば、『了庵代』や「無極代」などは、撰者である慧明・慧徹の活動時期から二〇〇年ほども下って書写されたものであるため、両書が正確に彼らの提唱を伝えるものか書誌的な問題が生じるのである。

ただ、このような問題は抄物に限ったことではなく、『曹

洞宗全書』に収録されている、一般に信憑性が担保されているような中世曹洞禅僧の語録に関しても同様である。[9] また、抄物の存在によって既存の語録の文献的価値が見直される可能性も有り得るのである。そこで、慧徹の語録と代語集の関係を例として一考を加えたい。

慧徹の提唱録である『無極録』と「無極代」の内容を比較すると、その形態は異なるが、実質的な内容はかなり類似する。以下にその説示を提示したい。次の引用文は「無極代」第四四番目の説示である。

> 薬山僧問、如何是和尚家風。山云、今夜年窮ㇾ歳尽、明朝新歳正二到ㇾ。此意如何。代云**星前人臥ス三千峰室ニ一、仏祖渠識得無ㇾ由**。
>
> （『無極和尚小参下語』一九丁表、傍線・句読点・太字筆者、以下同）

ここでは薬山惟儼（七四五～八二八）の公案が本則として提示され（傍線）、それに対して「代云」として慧徹の代句が示されている（太字）。本則の内容から察すると、おそらく除夜に行われたものと考えられる。これをふまえた上で『無極録』の「除夜小参」の説示を確認したい。

> 除夜小参。挙、僧問二薬山一、如何是和尚家風。山云、今夜年窮歳尽、明朝新歳正到。師曰、薬山為二慈悲一故有二落草談一。山僧不ㇾ然。若有ㇾ人問二如何是和尚家風一、向曰、**星前人臥千峰室、仏祖無ㇾ由ㇾ識二得渠一**。
>
> （『訓註曹洞宗禅語録全書』〈四季社、二〇〇五年〉一巻、三六七頁）

『無極録』の傍線・太字部分と「無極代」の傍線・太字部分を比較すると、両書の本則と代句および一転語はほぼ同一であることが確認できる。

先述の如く、代語集とは朝参における説示記録であり、語録は上堂・小参を中心とした説示記録であるが、この一致はもはや、同一内容の説示が、一方では朝参による代語提唱として、一方では伝統的な小参の説示として記録されているとしか言い得ない程である。

しかもこのような類似が見られるのは右の説示だけではない。『無極録』には全部で三一の説示が収録されているが、それらを「無極代」の説示と対照すると、実に二九の説示が右の例のように「無極代」とほぼ同一であったり、共通する部分が見られるのである。

このような『無極録』と「無極代」の関係については既に拙稿において、「『無極録』は「無極代」を基に語録として再構成されたもの、そして、慧徹の実際の提唱は上堂・小参よりも朝参を主とするものであった」という推察を示した。[10]

その根拠として、両書の説示を比較すると「無極代」の方がより内容の整合性が取れているということや、また『無極録』が書写された状況に関する伝記上の記述に矛盾が見える

ことなどを挙げた。その他詳細については上記拙論に譲るが、慧徹における語録と代語集の存在は、禅僧個人の宗風や活動を捉える上で大きな問題を投げかけるものと言える。

何故なら、ほぼ同一の内容を有する同一人物による説示が、語録という形態で記録されているか、それとも代語集という形態で記録されているかによって、その思想に対する評価が著しく変化する可能性が存するからである。

そもそも了庵派において顕著な朝参という提唱方法は、近世宗学者によって批判の対象となっている。例えば面山瑞方（一六八三～一七六九）は『洞上僧堂清規考訂別録』巻六「告香普説付垂示考訂」において次のように述べている。

日本洞下ニ、早参、晩参ノ式廃シ、五参上堂ナドハ一向ニ知ラズ、朔望ノ上堂小参モナクナリテ、中古ヨリタダ垂示代語バカリノコリテ今ニ至ル、ユヘニ今此モ、師家ノ古則ヲ挙シテ、衆ノ下語了テ、末ニ自ラ下語スルヲ、関東ニテハ代語ト云フ、ソノ師家ヲ俚諺ニ、代語房主ト云ユヘニ、規矩ヲ行フ寺デハ、代語ト云ヲイヤガリテ、垂示ト云ナリ

（『曹洞宗全書』「清規」二八〇頁）

この一段は、関東を中心とした了庵派の代語に対する、宗統復古以後に隆盛を迎えた宗学からの批判的見解と捉えることが可能である。[11] 代語提唱の黎明期にその宗風を振るった慧徹などは、第一の批判対象となるべきであったことであろう。

他方、語録としての形態を持つ『無極録』は、例えば次のように評価されている。

先師の門風を受けつつ、語録が拈香や祭文、挙火等の法要の法語を全く含まず、純粋に師家としての言葉が綴られているところに、無極の家風が色濃く出ており、通幻禅師から脈々と受け継がれている孤高峻厳とした門風がここに表れてきていると言えよう。

（平子泰弘「『補陀開山無極禅師語録』及び『上州大泉山補陀禅寺伝記』について」〈『宗学研究紀要』一九号、二〇〇六年三月〉七九頁）

ここで平子泰弘氏は、慧徹の宗風が寂霊から「脈々と受け継がれている孤高峻厳」なるものとして肯定的に捉えている。このような評価の違いは、対象者の思想に向けられたものではなく、語録か代語集かという形態の違いによって規定されていると考え得る。

ここで指摘しておきたいのは、既にある禅僧のものとして受容されている既存の語録についても、書誌的・内容的に考察すべき余地、あるいは問題が存在しているということである。[12] それを解決するためには、語録・抄物といった分類上の差異にとらわれず、史料の内容を確実に把握することが必要であり、また異なる史料同士の関連性や共通性を見出すことも重要と考える。

そこで以下では、通幻派の祖である寂霊の語録の書誌・内容を改めて考察し、以後の門弟達のものとされる史料と如何なる関係性が見えるか明らかにしたい。

『通幻禅師語録』書誌再考

寂霊の語録には、写本と刊本が各二種ずつ現存している。写本は寂霊の開山となる龍泉寺と永沢寺にそれぞれ所蔵されている。龍泉寺所蔵本（外題『通幻禅師語録』）の書写年代や伝承は不明であるが、永沢寺所蔵本（外題『通幻大師三山語録』）は宝暦三年（一七五三）に永沢寺二六〇世明極即証（一六八四～一七六七）によって書写されたものである。

刊本は、月坡道印（一六三七～一七一六）によって延宝三年（一六七五）に刊行された『通幻禅師漫録』と、密雲彦契（一七〇三～一七四九）によって寛保二年（一七四二）に刊行された『通幻禅師語要』がある（以下便宜上、単に「寂霊の語録」というほどの意味を示す場合は『通幻録』という呼称を用い、各本を具体的に示す場合は提示した順に、龍本・永本・『漫録』・『語要』の略号を用いる）。この二種の刊本は共に写本の抜粋であるため、寂霊の宗風を探るには写本が根本資料となる。

しかしながら、『通幻録』の二写本の間では説示内容にかなりの異同があるため、その内容を考察する前に、両本の性質を明らかにする必要がある。

まずは龍本と永本の内容構成を掲載順に示す。上段が龍本、下段が永本の構成である。

龍本構成

①〔總持禅寺開堂語録〕
（永徳二年八月二三日～）
②〔總持禅寺開堂語録〕
（嘉慶二年一一月二七日～）
③通幻霊禅師永沢語録
④〔太平山龍泉禅寺開堂語録〕
⑤下火・⑥拈香・⑦開光
⑧自賛・⑨偈頌

永本構成

①〔總持禅寺開堂語録〕
（永徳二年八月二三日～）
②丹後永谷（ママ）寺開堂語録
③太平山龍泉寺開堂語録
④總持禅寺開堂語録
（嘉慶二年一一月二七日～）
⑤自賛・⑥仏祖賛・⑦銘
⑧下火・⑨辞世

両写本に順序の違いはあるが、内容的には總持寺・龍泉寺・永沢寺の三ヵ寺における語録と、下火や拈香などを中心とした法語類で構成されている。書誌については、既に田島柏堂氏と佐藤秀孝氏による研究成果が存するので、ここで両氏の見解を確認しておきたい。

【田島氏の説】

いま龍泉寺本を永沢寺本および『漫録』、『語要』の諸本と比較するに、字句相前後し、あるいは相違し、また筆写の際における誤写、脱字もあり、編集の方法も前後しているが、龍泉寺本は最もよく整備されている。従って永沢寺本は草稿本のようであり、この龍泉寺本は再治本であるとも考えられる。

（『曹洞宗全書』「解題索引」一六八頁）

【佐藤氏の説】

（龍泉寺本は）永沢寺本と比較すると、編纂の方法がきわめて素朴であり、草本的な色彩が認められる。永沢寺本がやや整備された感があるのは、龍泉寺本を整備統制して再治したことによるのであろうか。とすれば、善救が実際に編集した素本を龍泉寺に残し、これに若干の手を加えたものを永沢寺に納めたものではないかと見られる。

（『訓註曹洞宗禅語録全書』二巻〈四季社、二〇〇四年〉、二四九頁、括弧内筆者）

田島氏は龍本が「最もよく整備されて」おり、永本が「草稿本のよう」であるとし、永本が元になって龍本が「再治」されたと推察している。一方、佐藤氏は田島氏の説とは逆に、龍本に「草本的な色彩が認められ」、永本に「やや整備された感」があるとし、永本がより整備された感があるのは龍本を整備再治したからと推察している。

このように両氏の見解には相違が見られる。両氏ともに一方が素本であり、もう一方はそれをもとに再治したものと位置づけている点は共通するが、田島氏は「永本が素本、龍本が再治本」、佐藤氏は「龍本が素本、永本が再治本」という立場である。ここで本論の資料編に付した一覧表に基づき両氏の説の検討と考察を行いたい。

資料編の一覧表は、龍本と永本の「總持寺語録（永徳二年～）」（以下「總Ⅰ」）、「總持寺語録（嘉慶二年～）」（以下「總Ⅱ」）、「永沢寺語録」（以下「永」）、「龍泉寺語録」（以下「龍」）を掲載順に一覧とし、その説示内容と年月日を加え、さらに龍本の説示に対応する永本の説示を対照してまとめたものである。詳しい凡例は資料編に譲るが、これによって龍本と永本の編纂上の特徴が明らかとなる。

まずは分量についてである。永本は「龍」の分量がやや少ないものの、「總Ⅰ」「總Ⅱ」「永」はほぼ等量である。それに対して、龍本では「總Ⅰ」「永」の量が極端に少なく、「龍」・「總Ⅱ」が多い。というよりも、「總Ⅰ」と「永」は開堂法語と陞座がそれぞれ二つ収録されるのみで、他の上堂・拈香は全て「龍」と「總Ⅱ」に含まれているのである。この偏りは、龍本の編集方針を反映していると考えられる。

龍本では、「龍」に収録される殆どが拈香法語であるが、「總Ⅱ」はほぼ全て上堂で構成されている。これは龍本の編者が意識的に、三仏忌や達磨忌、祖師忌、入牌といった仏事法語を「龍」に収録し、上堂や小参などの提唱語は「總Ⅱ」に収録したためと考えられる。つまり、龍本では状況の如何に関わらず、拈香語は「龍」に収録し、上堂・小参の語は「總Ⅱ」に収録しているのである。

それに対して永本の編者は、その説示が行われた場所や時

系列を意識しているため、龍本に比べると寂霊の行状に沿った編集を行っていると考えられる。

このような編集方針の違いを証明する具体例が、龍本と永本の降誕会の説示に見られる。龍本では「龍」の第一一番目の説示に、

仏誕生拈香。雨洗レ雨風磨レ風。水緑花紅。釈迦老子指レ天指レ地。自言天上天下唯我独尊。噫。従レ然南瞻浮州生二荊棘一悩二乱諸人一。総持今日不レ行二雲門令一。只要下一杓悪水灑二驀頭一。与二諸人一報恩去上。良久曰。稽首大聖。驢胎馬腹。馬腹驢胎。

（『曹洞宗全書』「語録一」七一～七二頁）

とある。傍線部の通り、ここで寂霊は自らを「総持」と称している。この自称は、寂霊が總持寺の住持としてこの法語を唱えていることを示すものである。よって本来は「總Ⅰ」か「總Ⅱ」に収録されるべきものであるが、龍本では「龍」に収録されているのである。それに対し永本では、これとほぼ同文の「仏生日」の説示が總持寺で行われた上堂として、「總Ⅱ」の九番目に収録されている。

このような編集方針の相違や、両本の字句の相違が大きいことなどもふまえれば、先行研究のように「一方が素本でありもう一方が再治本」と考えるよりも、むしろ両本は異なる編集基準でまとめられた別系統の写本と捉えるべきである。

ここで一つ注目したいのが、両本における上堂・小参の記録である。両本には右のような相違が見られるが、この点については一致する箇所が存する。それは永本の「總Ⅰ」「總Ⅱ」と、龍本の「總Ⅱ」部分である。一覧表の⑤⑥における両本の対照を見てわかる通り、龍本の「總Ⅱ」の記録と、永本の「總Ⅰ」「總Ⅱ」の記録は、その順序に共通する部分が多く見られる。特に總持寺住持中の晩年の記録である龍本「總Ⅱ」39以降は、永本「總Ⅱ」11以降とほぼ一致するのである。

両本の編集基準に相違があるにも関わらず、このような一致を見るのは、この部分が通幻の提唱の原型をより正確に留めている可能性が高いためと推察する。これらの箇所は他の部分に比べて語句の異同が比較的少ないという事実も、一つの証左となろう。

対照的に、例えば龍本で拈香法語を集成したと考えられる部分の記録は、それと対応する永本の記録と異なる場合が多い。『通幻録』の二種の写本と二種の刊本を校合した『通幻禅師全集』（伊藤慶道編、山喜房、一九四〇年）では、永本と龍本の所載が大きく異なる場合、「大異」として明記される。この「大異」とされた三〇の説示のうち、実に二四の説示が拈香法語にあたるのである。

以上の事実から、『通幻録』の中でも總持寺における上堂・小参部分は、他の部分に比べて寂霊の説示をより正確に

伝えているものと考える。

『通幻録』における中国曹洞禅の影響

従来の研究において寂霊の宗風・家風として取り上げられるものは、伝記上にみえる「活埋阬」や「文字点検」といった逸話や[13]、五位の影響に関することが多く、『通幻録』の内容から寂霊の宗風や思想背景について言及している論考は少ない[14]。従ってここでは、前項の考察に準り總持寺における上堂・小参の記録を中心として、寂霊の具体的な思想背景を探りたい。

『通幻録』における寂霊の引用典籍を調べると、明らかに中国曹洞禅僧の語録が多い。中でも、宏智正覚（一〇九一～一一五七、以下正覚）・真歇清了（一〇八八～一一五一）・自得慧暉（一〇九七～一一八三）・天童如浄（一一六二～一二二七、以下如浄）といった宋代曹洞禅僧の言句が多くみられることから、寂霊は宋代曹洞禅の宗風を特に意識していたことがわかる。

本論では、『通幻録』において特徴的な引用が見い出せる正覚の『宏智録』と如浄の『如浄和尚語録』（以下『如浄録』）との関係について考察を行いたい。

まず『宏智録』についてである。『通幻録』における『宏智録』の引用は、他の典籍に比べて特に多く確認できる。その引用方法の特徴としては、次の三通りに大別できる。

A：『宏智録』の一節を引用して一転語とする
B：提唱全体を『宏智録』の引用で構成する
C：問答・説示中の一句として『宏智録』を引用する

これらのうち、AとCは『通幻録』全体に見えるが、Bは總持寺での上堂記録においてのみ確認できる。Bに該当する説示を一覧表で示せば、「永本總Ⅰ12＝龍本總Ⅱ20」、「永本總Ⅰ14＝龍本總Ⅱ23」、「永本總Ⅰ16＝龍本總Ⅱ26」、「永本總Ⅰ19＝龍本總Ⅱ30」が挙げられる。

次に示すのは「永本總Ⅰ12＝龍本總Ⅱ20」である。上段が永本、下段が龍本の本文である。

上堂。華愛惜散、草棄嫌生。一段風光画図不レ成。[I]廓浄無際智与レ之俱。普応無方神与レ之会。智虚而自照惺々。神用而蜜行綿々。所以道、山河無二隔越一、処処是光明。畢竟如何。良久云、[II]劈二開華岳連天色一、放二出黄河倒海声一。下座。

（『禅学大系』「祖録部五」五頁）

半夏上堂。華愛惜散、草棄嫌生。[III]一段風光画図不レ成。廓浄無際智与レ之俱。普応無方神与レ之会。智虚而自照惺惺。神用而綿綿。一切時放二大光明一作二大仏事一。所以道、山河無二隔越一、処処是光明。[IV]劈二開花嶽連天色一、放二出黄河到海声一。

（『曹洞宗全書』「語録一」八四頁）

寂霊は半夏上堂として、冒頭で「華愛惜散、草棄嫌生」という『正法眼蔵』「現成公案」巻の一文を夏の情景に重ねて提示する。「一段風光」は「画図不成」、すなわち情慮の及ば

ぬ本来的な境地であり、「之」と共にあるべき「智」と「神」の在り様とはたらきを「光明」と「仏事」に約して説く。さらに「光明」の普遍性を示し、「華嶽」・「黄河」の情識を越えた境涯を一転語としている。

本来性と自己の在り方の相即を、無情の風光によって捉えた説示と考えられるが、傍線Ⅰ～Ⅳは全て『宏智録』巻三（宋版六冊本、以下同）の明州天童山景徳寺における上堂を典拠とするものである。傍線Ⅰ・Ⅲは巻三第六上堂から、傍線Ⅱ・Ⅳは巻三第九上堂からの引用である。次に各典拠を示す。

【第六上堂】

上堂云、**廓浄無際而智与レ之俱**。普応無方而神与レ之会。智虚也惺惺自照。神用也綿綿不レ勒。便能一切時一切処**放二大光明一、作二大仏事一**。**所以道、山河無二隔越一、光明処処**透。

（石井修道編『宏智録』上巻〈名著普及会、一九八四年〉一五三頁、訓点筆者、以下頁数のみ表記）

【第九上堂】

上堂云、諸禅徳、呑二尽三世仏底人一、為甚麼開口不得。照二破四天下底人一、為甚麼合眼不得。許多病痛、与レ你一時拈却了也。且作麼生得二十成通暢一去。還会麼。**擘二開華岳連天色一、放二出黄河到海声一**。

（『宏智録』上巻　一五五頁）

太字部分が『通幻録』との対応箇所である。全文が完全に一致するわけではないが、寂霊は『宏智録』を参照し、正覚そのものとも言える説示を構成していたのである。

『通幻録』においてこのような形で引用される典籍は、『宏智録』以外に確認することが出来ない。總持寺における学人接化の場で、寂霊は黙照の家風を強く宣揚していたのである。

次に『如浄録』についてである。寂霊による『如浄録』の引用頻度は『宏智録』に較べて少ないが、聖興寺の門前に建設された橋供養の上堂[15]や、講戒の説示[16]等といった特徴的な説示に引用されており、その影響は無視できない。中でも特に注目すべきは、韶碩の忌辰上堂であろう。本上堂は龍本の「總Ⅱ」第四九番目に「峨山和尚廿五年忌陞座」として収録されるものである（永本では「總」第二上堂）。

韶碩[17]の二五年忌は明徳元年（一三九〇）一〇月二〇日に当たるが、寂霊は輪住制のため、翌二一日に總持寺を辞している。寂霊は翌年五月五日に龍泉寺に示寂しているため、退院の法語を除けばこの忌辰上堂が最後の提唱となる。總持寺に三住もした寂霊にとっての、同寺での化導を総括する提唱であったと考えられる。次にその本文を示す。

峨山和尚廿五年陞座。廼曰、西天法輪張来打レ油。東土法輪李来打レ油。諸嶽法輪四方八面来打レ油。三段不レ同、収帰二上科一。

（『曹洞宗全書』「語録一」八八頁）

「西天」、「東土」、「諸嶽」の三つの法輪の下に、それぞれ「張」、「李」、「四方八面」の人々がやってきて油をしぼって

いく。この「三段」は同じでは無いが、収めれば「上科」に帰すという意である。「西天」・「東土」より伝来した仏祖の教えが、「諸嶽」、すなわち韶碩の下に到って円成し、總持門下が興隆したことを、韶碩に対する追慕の念と共に表現していると捉えられよう。

一転語の「三段不同」が巧みに機能していると言えるが、この構成に『如浄録』の影響が見られるのである。それは次に示す「空仮中三観」の偈頌である。

空仮中三観。張来張打レ油、李来李打レ油。通身骨轆転、打得最風流。（『如浄録』巻下〈『大正蔵』巻四八、一三〇中〉）

天台学の根本教義である空仮中の三観が、日常底の事象によってまさしく「風流」に表現されている。そして傍線部分から、寂霊が明らかにこの偈頌を参照したことがわかる。

池田魯参氏はこの偈頌が「天台学に寄せた如浄の造詣の一端」を示すものとし、「天台止観の根本に関わる課題に如浄が関心を寄せていた」事実として指摘している。[18]

寂霊が韶碩の忌辰上堂において、この偈頌を参照した理由は、寂霊の行状から推察することができる。次の引用文は『日域洞上諸祖伝』巻上「永沢寺通幻寂霊禅師伝」の一節である。

十一歳入二台山一受業。天性英敏。凡内外経史、一経二其目一、無レ不二通暁一。台徒交相称誉。十四剃落納戒。或於二止観中一、有レ所二疑問一。……雅慕二禅門直指説一、乃往二能之総持一、参二峨山和尚一。師礼拝才起、山問、甚処来。師云、天台来。山云、欲レ求二何事一。師云、某甲於二止観之理一、未レ決二所疑一。請師指示。山云、莫妄想莫妄想。便起去。師疑情愈熾、研究不レ怠。（『曹洞宗全書』「史伝上」四六頁）

これによれば寂霊の参学は比叡山において始まったのであり、天台止観の教学を学ぶうちに疑問を生じ、總持寺の韶碩の下を訪れている。そして、韶碩との初相見で問題となったことも「止観之理」であった。

さらに疑念を増した寂霊はこの後弁道に励み、「身心脱落」の話によって「忽然大悟」することになるが、[19]初期の参学における寂霊と峨山の関係は、天台学に関する疑念と解消によって結ばれていたのである。

寂霊は韶碩との初相見や修行時代に対する懐古の念から、如浄の天台学に基づいた偈頌を参照し、自身の「空仮中三観」の法語を唱えたと考えられる。[20]

以上の如く、『通幻録』と『宏智録』・『如浄録』との関係を明らかにした。本項の考察からは、従来言及されてきた「文字点検」の逸話に見られる、祖録経典に執われることを厳しく排除した姿とは異なる寂霊像が浮上する。寂霊は祖師の典籍を縦横に用い、宋代曹洞禅の宗風を受容し鼓吹していたのである。

寂霊とその門弟における宗風の連続性

『通幻録』の引用典籍の把握によって、寂霊における『宏智録』と『如浄録』の影響について考察したが、寂霊がこれらの語録を重用していたことを裏付ける資料として、次に示す『総持五世通幻大和尚喪記』が挙げられる。

寄寘永沢寺若干

一法衣先師伝衣　壹縁　一坐具唐櫃入焉　壹展
一盆盂　壹副　一儀軌先師花押　壹本
一天童浄和尚語録　四冊　一拄杖　壹枝
一竹篦永平開山親製　一箇　一三宝印　壹面
一喪記　二冊　一伝灯録　壹部
一正法眼蔵黒漆箱入　全部　一宏智録　十二冊
一法被唐錦　壹幅　一綵段卓袱裏北絹　壹襲
一入院式　壹冊　一洞谷開山遺付記　壹冊

（伊藤慶道編『通幻禅師続語録』〈山喜房、一九四〇年〉四八頁）

右の一覧は、寂霊遷化後に永沢寺に寄贈された什物を示しているが、この中に『宏智録』と『如浄録』が確認できる。両書は他の遺品と共に永沢寺に寄進され、門弟達に残されたのである。

ここで『宏智録』は「十二冊」とされているが、おそらく宋版の六冊本を二分した書写本であったと推察できる。石井修道氏は松ヶ岡文庫に所蔵される一〇冊本『宏智録』を紹介しているが、この一〇冊は「真州長蘆覚和尚拈古」と「天童覚和尚小参」の二冊を欠いた本来一二冊のものであり、宋版の六冊を二分したものと推察されている。[21]

しかも、この松ヶ岡文庫所蔵本は寂霊の法嗣である天鷹祖祐（一三三六～一四一三）の勧請開山となる、通幻派の尾張雲興寺で永享十年（一四三八）頃に書写されている。これは『喪記』に記された一二冊本が、通幻派の中で伝写されていたことを推察させるものと言える。以下、門弟達の語録・抄物から、寂霊との宗風の連続性を考察する。

寂霊の高弟に越前禅林寺を開山した普済善救（一三四七～一四〇八、以下善救）がいる。『普済禅師語録』（以下『普済録』）の永沢寺開山忌拈香からは、善救が寂霊の宗風をどのように捉えていたか、端的に知ることができる。

開山和尚諱日。拈香云、風揺[V]池水琉璃滑、雨滴山光翡翠浮。緑樹重陰門寂寂、杜鵑啼レ血為レ誰愁。共惟、当寺開山通幻和尚大禅師、洞上嫡伝、人天主翁、真俗共瞻仰、禅衲尽増崇。……田地穏密消息、伝家清白宗風。妙明体尽知傷触、偏正回互不レ犯レ中。同中有レ異、亡レ功就レ位。異中有レ同、在レ位借レ功。[VI]一歩密移玄路転、全身放下劫壺空。且道、黄閣簾垂、糸綸未レ降。紫羅帳合、視聴難レ通。正当恁麼時、還無レ有二報恩分一麼。[VII]諸人作麼生体悉得。挙レ香云、犀通二半夜月一、鶴夢三千年松一。[VIII]

（『曹洞宗全書』「語録一」八頁）

善救は寂霊を「洞上嫡伝」であり、「田地穏密」にして「清白宗風」であると評し、さらに偏正・位功といった中国曹洞禅の機関に基づいた説示を展開し、寂霊の宗風を称えている。さらに傍線Ⅴ～Ⅷの語は、『宏智録』と『如浄録』からの引用である。[22]『普済録』の出典傾向を調べると、宋代曹洞禅僧の典籍が多く、中でも『宏智録』が突出している。善救も寂霊と同じく、『宏智録』を中心とした「洞上」の教えを自らの提唱に自在に織り込み、学人を接得したのである。

次に慧明と慧徹の代語集を対象としたい。「無極代」と『了庵代』の説示には、本則として『宏智録』が選択されている箇所を確認できる。例えば『了庵代』では、

宏智云、十洲春尽花彫残、珊瑚樹林日杲々、如何委悉、代玄功踏絶処

（『了庵代』一二丁表～一二丁裏）

とあり、また「無極代」では、

宏智古仏云、妙存湛々而不有、真照霊々而不レ無ニ、更於テ其間ニ而退歩看、白雲断処青山瘦、此意如何、代誰知雲外千峯上、別有ニ嶺松ウ一帯レ露ヲ寒キ

（『小参無極和尚下語』一八丁表～一八丁裏）

として、直接「宏智云」・「宏智古仏云」と引用され、朝参における参究対象として用いられている。

また、これよりも直接的に『宏智録』を依用していた状況が、『了庵代』と「無極下語」に示されている。

まずは「無極下語」についてである。本書は、慧徹が正覚の『宏智録』巻四に収録される天童山での小参説示（以下「天童小参」）を題材として代語提唱を行った記録である。次にその具体例を示したい。上段が「天童小参」、下段が「無極下語」である。

小参。僧問、**蘆花雪月、那時一色却テ迷、色還迷、野水秋空、箇処大功猶在。如何得ニ色転功忘一去。**師云、往来如レ得レ路、両処不ニ相妨一。僧云、玉輪機転笑呵呵、直下相逢不ニ相識一。師云、又堕ニ大功一去也。僧云、**那辺不レ守ニ空王殿一、争肯耘レ田向ニ日輪一。**師云、早恁麼却較ニ些子一。

（『宏智録』上巻　二四〇頁）

○芦花雪月、**那時一色却テ迷、野水秋空。**代洞庭無レ蓋浸法身。取合同ノ一色毫氂無シ隔テ／○箇レ**処ロ大功猶ヲ在リ、如何得ニ色ヲ転功ヲ忘ジ去ルコトヲ。**代云踏ニ断シテ十分清白ノ雪キヲ、密ニ移シテ一歩ヲ一転ス玄路ヲ。取莫レ守ルコトヲ一色ノ処ヲ、莫レ生ニ万年ノ床ニ。／○**那辺不レ守ニ空王殿一、争カ肯テ耘レ田向ニ日輪ニ。**代云樞機妙ニ転シテ主全主、且ツ在半途ニ不レ待レ春。

（『小参無極和尚下語』一丁裏）

「天童小参」太字部分が代語の対象となる語句である。冒頭の「蘆花雪月、那時一色還迷、野水秋空」のみが選択され、それに対し「代洞庭無レ蓋浸法身」という慧徹の代句が記録されている。それに続く「取合同ノ一色毫氂無シ隔テ」とは、取

句と称される会下の学人の言葉であり、「無極下語」が公の提唱における記録であったことを確認できる。以下同様の形式で、「天童小参」の説示から順に語句を抽出し、それぞれに代語を行っている様子が明らかとなる。

この代語は「天童小参」における三六の小参全てに対して、本文の順序に従い為されており、慧徹はある一定の期間に「天童小参」を講述の素材として用い、順に説き進めたと推察できる。そして「無極下語」という、「無極代」とは異なるもう一種の代語集として記録されたと考えられる。

「無極下語」と同様の形式は、慧明の説示にも確認できる。『了庵代』の末尾部分には、『宏智録』巻一の小参（「長蘆小参」）を順に提唱した記録が存する。

小参云、好兄弟……**玉人未レ照当台鏡、石女不レ登月下機。**可レ謂、枯木龍吟、猶帯レ喜在。髑髏眼睛、猶帯レ識在。**直是智不到処、路已転時、且道合作麼生体悉。良久云、還会麼、蘆荻易レ分相混雪、水天難レ弁合同秋。**

（『宏智録』六四～六五頁）

玉人未照当台鏡、石女不登月下機。代自可著珍□―□。**直是智不到処、路已転時、且道、合作麼生体悉。良久曰、還会麼、蘆荻易分相混雪、水天難弁合同秋。**代退歩承当。取此中有理可難訴、是不愁人又断魂。又借功明位。又唯独自―見。

（『了庵代』八六丁表）

太字部分の対照から、慧明が『宏智録』の語を順に抽出し、代語を行っていることが確認できる。これを「無極下語」と比較すれば、同一の形式であることは明らかである。

このように、慧明と慧徹に関する抄物には、1「ある典籍を題材として順に代語提唱を行う」、2「その題材に『宏智録』を選ぶ」という二点の連続性が認められる。[23] これはさらに、前項で考察した寂霊の『宏智録』を主体とした提唱とも繋がると言えるであろう。

この連続性は同時に、各資料が三者の提唱を実際に記録したものであることの証左になり得ると考える。彼らは門弟接化の場において『宏智録』を根本に据え、その思想を開示していたのである。

むすびにかえて

以上、寂霊とその門弟達の語録・抄物を考察し、『宏智録』を中心とする中国曹洞禅の影響について明らかにした。

日本曹洞宗の宗祖である道元（一二〇〇～一二五三）は正覚を「古仏」と称えその思想を高く評価したが、道元自身の思想は正覚の黙照禅に留まるものではなく、それを超克（あるいは発展的継承）したところにあるとされる。[24] 道元を宗祖として仰ぐ日本曹洞宗教団の宗侶にとっては、道元思想を継承することが本懐となるべきであろう。しかし、初期の通幻派

では『宏智録』を中心とした化導が行われていたのである。

寂霊の半夏上堂における「現成公案」巻の引用や、『喪記』の一覧に『正法眼蔵』が記載されていたことから、寂霊が道元の著作を閲読していたことは疑いないであろう。とすると、寂霊は道元の思想に触れながらも、正覚の思想を全面に打ち出していたことになる。

これは、義雲（一二五三～一三三三）や瑩山紹瑾（一二六四～一三二五、以下紹瑾）が道元の思想を承けながら、正覚の思想を受容したことと相通じるものであろう。義雲や紹瑾には「曹洞宗」としての意識を高揚させ、教団を確立する意志が存したのである。[25]『宏智録』は、「永平寺教団」から「日本曹洞宗」へと展開する上での、思想的な拠り所となっていたと考えられる。

ただ、寂霊が總持寺を率いた時期は、「日本曹洞宗の確立」という意識に加え、更に円覚寺を中心に展開した曹洞宗宏智派の存在が視野にあったと推察する。

東明慧日（一二七二～一三四〇）によって伝来した宏智派は五山に留まらず、越前や肥後といった地方への展開も果たし、一時期強い影響力を持っていた。永平下では寒巌義尹（一二一七～一三〇〇）の一派と宏智派の交流が知られるが、慧明や善救、石屋真梁（一三四五～一四二三）といった寂霊の高弟達も宏智派の人々に参じている。

寂霊が門弟を指導する上で、宏智派の存在が影響を与え、更なる中国曹洞禅への傾斜を促し、結果的に『宏智録』を根本とする宗団へと変化していったと考えられる。

本論で考察した寂霊とその門弟達の語録・抄物は、この宗風変化を如実に示すものと言えよう。『宏智録』は通幻派の教線展開において門弟化導の側面を支える思想的主柱だったのであり、曹洞宗展開史の上においても大きな意義を有しているのである。

註

（1）周知の如く、洞門抄物は国語学の分野から中近世における東国語の研究対象として見出され、史料の発掘および考察が進められた。曹洞宗学からの研究は石川力山氏の作業仮説「中世の未開拓の分野の空間を埋める資料が、洞門抄物と呼ばれる、中世に数多く出現する曹洞宗関係の禅籍抄物であろう」の下に精力的に進められ、抄物の分類・成立・思想などに関する主要点が明らかにされ、その成果は『禅宗相伝資料の研究』上・下巻（法蔵館、二〇〇一年）にまとめられている。また安藤嘉則氏や飯塚大展氏の研究により、洞済を問わない広い範囲の抄物が取り上げられ、当時の禅僧達の思想背景がより詳細に明らかにされてきている。

（2）十五世紀半ばに成立したと考えられる了庵派の清規『回向并

式法』（最乗寺所蔵）には、「二月一日、諸行事如レ常。自二朔日一十四日迄、遺教経誦ベシ。又朝参在」（一五丁表）や「（四月）八日、五更陀羅尼行事如レ常。日中ナシ。朝参在也」（二〇丁表）というように朝参が規定されている。右の例によれば、旦日や結夏といった従来であれば上堂が行われるべき日に朝参が行われていたことになる。なお、『回向并式法』の翻刻・考察については、尾崎正善「翻刻・大安寺蔵『回向并式法』」（『曹洞宗宗学研究所紀要』九号〈一九九五年一〇月〉所収）・同「大安寺蔵『回向并式法』について」（『宗学研究』三八号〈一九九六年三月〉所収）がある。また、『回向并式法』と代語文献にみえる諸行事との関係性については、安藤氏の研究に詳しい（『中世禅宗文献の研究』〈国書刊行会、二〇〇〇年〉一八七～一九一頁）。

（3）代語に関する先行研究として、安藤氏による「中世曹洞宗における代語文献の研究」（『駒沢女子短期大学研究紀要』二八号、一九九五年三月）をはじめとする一連の論考が挙げられる。安藤氏は膨大な代語関係史料を収集・解析することで、それを禅宗文献史上に位置づけている。筆者による無極の語録と代語集に関する考察は、このような安藤氏の研究成果に浴するものである。

（4）安藤嘉則『中世禅宗文献の研究』四一頁参照。

（5）安藤嘉則「再び代語・再吟について」（『宗学研究』四五号、二〇〇三年三月）、拙稿「雙林寺所蔵『無極和尚小参下語』について」（『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』一二号、二〇一一年六月）参照。

（6）『無極和尚小参下語』は『曹洞宗文化財目録解題集』六関東管区編（曹洞宗宗務庁、二〇〇三年）では「雙林寺典籍111〔無極派下門参〕一冊」（四六二頁）として掲載されている。

（7）石川力山「洞門抄物の発生とその性格」（『松ヶ岡文庫研究年報』二号、一九八八年二月）八八～八九頁。

（8）石川力山「『人天眼目抄』の宗教」（『宗教研究』二三四号、一九七七年一二月）一三三～一三四頁。

（9）『曹洞宗全書』「語録一」・『続曹洞全書』「語録一」には中世曹洞禅僧の語録が一六種収録されているが、それらの底本となっている写本・刊本の書写年・開版年は、各禅僧の実際の活動年代を大きく降る江戸期のものが多い。例えば正慶元年（一三三三）に遷化した義雲の語録は正徳五年（一七一五）の開版本が用いられており、応永七年（一四〇〇）に遷化した月泉良印の語録は寛延二年（一七四九）の開版本が用いられている。ただし、これらはあくまでも『曹洞宗全書』の底本に限った例であり、『義雲録』や『無極録』のように、語録によってはそれより以前の諸本がある場合も存するので一概に全ての信憑性を問題視するわけではない。各底本の詳細については『曹洞宗全書』「索引解題」一六五～一七六頁、四八〇頁を参照されたい。

（10）拙稿「無極慧徹の語録と代語集―雙林寺所蔵「無極大和尚節

之御参」を中心として―」（『駒澤大学禅研究所年報』二二号、二〇一〇年一二月）。

（11）面山瑞方による代語禅批判については、既に佐橋法龍氏や安藤嘉則氏によって指摘されている（安藤嘉則『中世禅宗文献の研究』一九〇～一九一頁、佐橋法龍『長国閑話』〈春秋社、一九八三年〉一四八～一四九頁）。

（12）無極の語録と代語集の例の他にも、韶碩撰とされる『山雲海月』に関する真偽問題が挙げられる。田島柏堂氏は、峨山の仮名法語などを包括した思想面と書誌の考察により、『山雲海月』の韶碩真撰であることを論じた（田島柏堂「峨山韶碩禅師の『山雲海月』について」〈『宗学研究』九号、一九六七年三月〉）。しかしながらその後、佐賀県円応寺に『山雲海月』の文明十一年（一四七九）六月に書写された古写本『山雲海月図』が発見され、見解が再び変化している。すなわち石川氏や飯塚氏による古写本の研究によって、延宝五年（一六七七）刊の『山雲海月』には含まれない本参部分が含まれていることがわかり、その結果、飯塚氏はこの真偽問題に関して「私は、『山雲海月』を仮に峨山派下の相伝の書として位置づけ、現時点においては真撰であるか偽撰であるかの判断は留保しておきたい」（「中世曹洞宗における本参研究序説（三）―峨山関連抄物と円応寺所蔵門参について―」〈『駒澤大学仏教学部論集』三〇号、一九九九年一〇月〉一七六頁）とし、真偽問題が再び俎上に載せられている。

（13）「師患下学者為二文句義解一所レ遮不上能レ見レ道。一切禁二絶文字一。五日一回捜レ堂。凡見二文字一即時焼却。僧堂前開二活埋窾一。毎レ有二新到一試二其所参一。不レ契者輒撞二入之一。由レ是喪レ身為レ法者聚焉。」（『洞上聯燈録』巻二〈『曹洞宗全書』「史伝上」二五九～二六〇頁〉）

（14）『通幻録』の内容に焦点を当てた主な研究成果としては、中嶋仁道『禅籍看読の要領』（山喜房、一九八〇年）が挙げられる。

（15）龍本では龍4（『曹洞宗全書』「語録一」七〇頁）、永本では永24（『禅学大系』「祖録部五」一九頁）に収録されている。『如浄録』の出典は巻二「謝造橋上堂」（『大正蔵』四八巻一二二頁中）であるが、寂霊は自己の橋供養に際して如浄の橋供養上堂を意識的に参照したと言える。

（16）講戒は龍本にのみ収録される説示である（『曹洞宗全書』「語録一」九〇頁）。

（17）韶碩の遷化年については貞治四年（一三六五）と貞治五年（一三六六）の二説があり、月日については小春（一〇月）二〇日とする説（「諸嶽二代峨山和尚行実」）と一〇月二一日とする説（「總持第二世峨山和尚行状」）が存する。ここでは龍本の「二五年忌陞座」に記載される「対レ他道、今日二十日。出世後如何。明日二十一日（『曹洞宗全書』「語録一」八八頁）に従って、本上堂が一〇月二〇日に行われたものと推定した。」

(18) 池田魯参『宝慶記―道元の入宋求法ノート―』(大東出版社、一九八九年)二一一頁参照。

(19) 「一日聞三山挙身心脱落話一。忽然大悟云、我会也。山云、汝作麽生会。師云、和尚莫レ瞞レ人好。山云、身心脱落時如何。師云、倒騎二仏殿一出二山門。山云、莫乱走。師云、羅籠不レ住。呼喚不レ回。払袖便去。山微笑。」(『曹洞宗全書』「史伝上」四六〜四七頁)。

(20) ただし、この解釈には一つの問題が存する。それは寂霊の生誕地の問題である。寂霊の生誕地には異説があり、近世期より主として豊後武蔵郷生誕説と京都生誕説の二説が挙げられている。現在では前者の説が有力となっているが、寂霊が天台山に学んだとするのは後者の京都生誕説に見られる記述であり、寂霊が比叡山に学んだか疑問が生じる。しかし、豊後生誕説にも疑問点が無いわけではなく、また寂霊が比叡山に参学していなかったとしても、天台学の素養があったこと自体を否定できるものではないであろう。なお、寂霊の生誕地に関する考察は、中島仁道『通幻和尚の考察』(山喜房、一九七七年)・山端昭道『通幻禅師物語―総持寺中興の祖―』(永沢寺刊、一九九〇年)などに詳しい。

(21) 石井修道「松ヶ岡文庫所蔵の『宏智録』十冊について―宏智録の日本への受容に関連して―」(『宗教研究』五一巻三号、一九七七年一二月)一二八〜一二九頁。

(22) 各傍線部の出典は、Ⅴ=『如浄録』巻一(『大正蔵』四八巻一二五頁中)、Ⅵ=『宏智録』巻一(五一頁)、傍線Ⅶ=『宏智録』巻二(一三二頁)、Ⅷ=『宏智録』巻五(三六七頁)である。

(23) 「無極下語」の考察と全文翻刻は拙稿「無極慧徹と『天童小参録』―雙林寺所蔵「小参無極和尚下語」翻刻―」(『曹洞宗研究員紀要』四三号、二〇一二年三月)を、『了庵代』における『宏智録』巻一「小参」の提唱記録に関する考察については拙稿「了庵慧明における『宏智録』の提唱」(『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』一三号、二〇一二年)をそれぞれ参照されたい。

(24) 石井修道氏は道元と正覚の思想的相違について「道元は自己の禅を一度たりとも黙照禅であるとはいわない。筆者はむしろ道元が黙照禅の継承者でなく、その葛藤・超克の上で道元禅を成立させたものと考える。かといって道元禅が看話禅と類似することはないが、修証観が全く異なる看話禅と道元禅が相違するのは自明の理であって、むしろ老荘思想を払拭できない黙照禅とは道元禅が全面的には一致しないところに道元禅の特色を認めるものである」(『宋代禅宗史の研究』〈大東出版社、一九八七年〉三七七頁)と考察している。ただし、道元と正覚の「坐禅箴」の比較論などで問題になるように、道元禅は宏智禅を「超克」したのか、それとも「継承」したのかという点については異論が存する。

（25）石川力山「『義雲録』における『宏智録』引用の意義」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』三五号、一九七七年三月）、新井勝龍「伝光録における曹洞禅と臨済禅」（『宗学研究』二三号、一九八一年三月）など参照。石井修道氏は「『宏智録』は道元にも大きな影響を与えるが、それ以後、時に臨済宗と曹洞宗が対立して、曹洞宗が自覚された時に、中国曹洞宗の宏智禅が再評価され、五位思想研究の重要な語録となった」（「松ヶ岡文庫所蔵の『宏智録』十冊について」一二九頁）と言及している。

【資料編】『通幻録』二写本　対照一覧表

凡例

一、本一覧表は、永沢寺所蔵『通幻大師三山語録』と龍泉寺所蔵『通幻禅師語録』の各本のうち、總持寺（延徳二年以降）、總持寺（嘉慶二年以降）、龍泉寺、永沢寺における各説示内容を一覧とし対照したものである。

一、項目①は永沢寺所蔵本の掲載順を、項目⑤は龍泉寺所蔵本の掲載順を示す。永本は永沢寺所蔵本、龍本は龍泉寺所蔵本を示す。「總Ⅰ1」・「龍3」等の表記は、「總持寺語録における第1番目の説示」・「龍泉寺語録における第3番目の説示」ということを示す略号である（總Ⅰは延徳二年の再住時の説示、總Ⅱは嘉慶二年の三住時の説示）。

一、項目②は、永沢寺所蔵本の所載と一致する説示が龍泉寺所蔵本に見られるかどうかを示すもので、存在する場合は○を、存在しない場合は×を付した。また、項目⑥の永本対照とは、龍泉寺所蔵本の各説示に該当する永沢寺所蔵本の説示番号を対照して記したものである。項目⑥の○表記は、本一覧表で対象とした部分以外に対応する箇所が存在することを示す。

一、項目③・⑦の説示内容について、内容の判別に資するために（　）に各説示の冒頭部分を記載した。また、拈香法語や仏事法語等の場合、上堂・小参といった提唱語と区別するために＜　＞を付した。

一、項目④・⑧の説示年月日について、各説示の年代が判明する場合のみ記し、推察できる場合は（　）で示し、実際の禅僧の行状や生没年等との整合が取れない場合は?で表記した。

	①永本	②	③永本説示内容	④説示年月日	⑤龍本	⑥永本対照	⑦龍本説示内容	⑧説示年月日
1	総Ⅰ1	○	永徳壬戌二年八月二十三日（開堂）	一三八二年八月二三日	総Ⅰ1	総Ⅰ1	永徳二年壬戌八月二十三日（開堂）	一三八二年八月二三日
2	総Ⅰ2	○	荐先師峨山老和尚上堂		総Ⅰ2	総Ⅰ2	光穏無等和尚大祥忌陞座	
3	総Ⅰ3	○	臘八上堂（見色明心～）	一〇月二〇日				
4	総Ⅰ4	○	荐光穏無等禅師上堂	一二月八日	永1	総Ⅰ2	一三七〇年八月一日（永沢寺開堂）	一三七〇年八月一日
5	総Ⅰ5	○	仏涅槃上堂（雨洗風磨～）		永2	永1	祥園開山無端和尚七年忌陞座	
6	総Ⅰ6	○	仏生日上堂（覚体円明～）	二月一五日	永3	永3	一三九三年二月二四日？（龍泉寺開堂）	一三九三年二月二四日
7	総Ⅰ7	○	結夏上堂（田地虚曠～）	四月八日	龍1	龍1		
8	総Ⅰ8	○	上堂（五五二十五～）	四月一五日	龍2	永4	為良超法印陞座	
9	総Ⅰ9	○	上堂（風光溢眼～）	（五月五日）	龍3	永25	越前州金津橋供養	
10	総Ⅰ10	○	上堂（想澄成国土～）		龍4	永24	加賀国能美郡安宅村太原山聖興寺門前橋供養	
11	総Ⅰ11	○	上堂（応時不触物～）		龍5	○	＜康暦改元年己巳八月二十八日供養薬師十二神＞	一三七九年八月二八日
12	総Ⅰ12	○	上堂（華愛惜散～）		龍6	○	＜地蔵点眼＞	
13	総Ⅰ13	×	上堂（十方世界自己光明～）		龍7	永9	＜仏涅槃拈香＞（四十九年血滴滴～）	
14	総Ⅰ14	○	上堂（十五日已前白漫漫～）		龍8	総Ⅰ3	＜仏成道拈香＞（一翳落眼～）	
15	総Ⅰ15	○	上堂（昨夜文殊普賢～）		龍9		＜仏成道拈香＞（冷坐六年～）	
16	総Ⅰ16	○	上堂（位裏転側～）		龍10	総Ⅰ5	＜仏涅槃拈香＞（荘厳聖化宗祐繁昌～）	
17	総Ⅰ17	○	上堂（門裏出身～）		龍11	総Ⅱ9	＜仏誕生拈香＞（雨洗雨風磨風水緑花紅～）	
18	総Ⅰ18	○	解夏上堂（無功妙旨～）	七月一五日	龍12	総Ⅱ27	＜仏成道拈香＞（冷坐六年瞎睡堆～）	
19	総Ⅰ19	○	上堂（釈迦前不出世～）		龍13		＜仏涅槃拈香＞（四枯四栄～）	
20	総Ⅰ20	○	荐広慧良性二上座上堂		龍14		＜韋馱天安座拈香＞	
21	総Ⅰ21	○	開山仏慈禅師忌辰上堂	八月一五日	龍15		＜仏誕生拈香＞（大月三十日小月二十九～）	
22	総Ⅰ22	○	上堂（意馬呑尽九山八海～）		龍16	総Ⅱ3	＜仏成道拈香＞（一人伝虚～）	
23	総Ⅰ23	○	〈初祖円覚大師拈香〉	一〇月五日（一一月）	龍17	総Ⅰ23	＜達磨忌拈香＞（寒巌松柏千年別～）	
24	総Ⅰ24	○	荐定法上座上堂		龍18		＜達磨忌拈香＞（南瞻浮州～）	
25	総Ⅱ1	○	嘉慶戊辰二年十一月二十七日（開堂）	一三八八年一一月二七日	龍19		＜峨山和尚忌拈香＞（青松万年操～）	
26	総Ⅱ2	○	臘月望上堂（南閻浮州）	一二月一五日	龍20		＜祥園無端和尚忌拈香＞	
27	総Ⅱ3	○	臘八上堂（一人伝虚～）	一二月八日	龍21	総Ⅱ28	＜無等和尚忌拈香＞	
28	総Ⅱ4	×	除夕小参（三百六十今日尽～）	一二月三〇日	龍22		＜同入祖堂＞	
29	総Ⅱ5	○	歳朝上堂（新年与旧年～）	（一三八九年）一月一日	龍23	総Ⅱ13	＜雲樹開山三光国師二十五年忌拈香＞	一三八五年五月二四日
30	総Ⅱ6	○	元霄上堂（堅窮三際～）	一月一五日	龍24	総Ⅱ8	＜太嶽山祥園開山忌拈香＞	二月二四日
31	総Ⅱ7	○	仏涅槃上堂（天蒼地皇皇～）	二月一五日	龍25	龍3	＜大山十三回忌拈香＞	
32	総Ⅱ8	○	荐太嶽無端禅師上堂	二月二四日	龍26	総Ⅱ39	＜大方勲和尚人牌＞	
					龍27	総Ⅱ23	＜峨山和尚十三回忌拈香＞	一三七八年一〇月二〇日
					龍28	総Ⅱ29	＜大山和尚七年忌拈香＞	

33	総Ⅱ9	○	仏生日上堂（雨洗風磨水緑花紅～）	四月八日	
34	総Ⅱ10	○	結夏上堂（劫前機肘後符～）	四月一五日	
35	総Ⅱ11	○	上堂（霖霪旬雨～）		
36	総Ⅱ12	○	上堂（芥納須弥～）		
37	総Ⅱ13	○	荐三光国済国師上堂	（一三八五年?）五月二四日	
38	総Ⅱ14	○	上堂（空劫真宗～）		
39	総Ⅱ15	○	上堂（今朝半夏野老憩牛～）		
40	総Ⅱ16	○	上堂（捉住乾坤～）		
41	総Ⅱ17	○	上堂（十五日以前～）		
42	総Ⅱ18	○	上堂（眼中物物中眼。門門廓脱～）		
43	総Ⅱ19	○	上堂（当位即妙～）		
44	総Ⅱ20	○	解夏上堂（不求諸聖～）		
45	総Ⅱ21	○	小参（第一義諦諸仏心源～）	（七月一五日）	
46	総Ⅱ22	○	荐自得無際証禅師上堂		
47	総Ⅱ23	○	峨山老和尚忌辰上堂	（一三八七年?）四月二一日	
48	総Ⅱ24	○	小参（平等性智非古来今～）		
49	総Ⅱ25	○	小参（此事如空合空～）		
50	総Ⅱ26	○	荐正祐上座小参		
51	総Ⅱ27	○	臘八小参（冷坐六年瞎睡堆～）		
52	総Ⅱ28	○	＜無等禅師忌辰拈香＞	一二月八日	
53	総Ⅱ29	○	＜聖興二世大山如元禅師七回忌拈香＞		
54	総Ⅱ30	○	＜仏泉開山了庵和尚忌辰拈香＞	（一二月三〇日）	
55	総Ⅱ31	○	＜聖珠上座忌辰拈香＞		
56	総Ⅱ32	○	＜覚心尼忌辰拈香＞		
57	総Ⅱ33	○	＜円道上座忌辰拈香＞		
58	総Ⅱ34	○	＜良一禅門忌辰拈香＞		
59	総Ⅱ35	○	＜見扶尼小祥忌拈香＞		
60	総Ⅱ36	○	＜為妙善尼拈香＞		
61	総Ⅱ37	○	＜真正尼忌辰拈香＞		
62	総Ⅱ38	○	＜智用大徳逆修頓写経王請拈香＞		
63	総Ⅱ39	○	＜為大方禅師入牌＞		
64	総Ⅱ40	○	＜為竺源禅師入牌＞		
65	総Ⅱ41	○	退院上堂（達磨眼睛～）	一三九〇年一〇月二一日	

29	総Ⅱ40		＜竺源西和尚入牌＞		
30			＜長徳真崇信庵主十三回忌拈香＞		
31		○	＜峨山忌拈香＞		
32		永20	＜洞谷開山忌拈香＞（雨洗風磨万古風流～）	九月二九日	
33		○	＜円空禅尼逆修入牌＞		
34		永14	＜月叟義印上座七周忌拈香＞		
35			＜無際七年忌拈香＞		
36	総Ⅰ21		＜洞谷開山忌拈香＞（海岸沈水檀林馨香～）	一三八七年四月二一日 八月一五日	
37		龍9	＜幻翁寿蔵司入牌＞		
38			＜妙善禅尼十三回忌拈香＞		
39	総Ⅱ36		＜峨山忌拈香＞（玉楼金殿万年峯～）	一〇月二〇日	
40	総Ⅰ37		＜真正禅門小祥忌拈香＞		
41	総Ⅱ26		＜正祐禅尼三十五日拈香＞		
42		永6	＜明慶知客小祥忌拈香＞		
43		永8	＜竹庵真禅師三十三年忌拈香＞		
44	総Ⅱ30		＜仏泉開山了庵和尚忌拈香＞		
45		龍6	＜古心是甘大徳大祥忌拈香＞		
46	総Ⅱ35		＜見扶禅尼小祥忌拈香＞		
47	総Ⅱ33		＜円道禅門三十三年忌拈香＞		
48		龍4	＜峨山和尚忌待夜拈香＞	一〇月一九日	
49		龍5	＜当日拈香＞	一〇月二〇日	
50	総Ⅱ34		＜良一禅門一周忌拈香＞		
51		○	＜道意禅門塔并拈香＞		
52	総Ⅱ38		＜智用大徳逆修拈香＞		
53			＜覚心禅尼十七年忌拈香＞		
54	総Ⅱ31		＜聖珠禅尼十三回忌拈香＞		
55	総Ⅰ20		＜広恵禅門良性禅門拈香＞		
56	総Ⅱ24		＜明恵大師拈香＞		
57		○	＜長谷信蓮神位拈香＞		
58			＜峨山忌拈香＞（咄咄。古人未了香～）	一〇月二〇日	
59		龍8	＜如還禅尼卒哭拈香＞		
60		○	＜秀泉庵主入牌＞		
61		○	＜道順庵主逆修＞		

66	永1	○	応安庚戌三年八月朔（永沢寺開堂）	一三七〇年八月一日	龍62		＜道玄禅門入牌＞	
67	永2	○	上堂（天水混時秋一色～）		龍63	○	＜妙円禅尼入牌＞	
68	永3	○	祥園開山無端和尚七周忌諸徒請上堂	（一三九三年二月二四日？）	龍64	○	＜了照禅尼小祥忌拈香＞	
69	永4	○	江州某氏為良超法印請師乞陞座		龍65		＜是欽禅門入牌＞	
70	永5	×	上堂（諸仏密旨祖師大機～）		龍66	○	＜妙観禅尼入牌＞	
71	永6	○	荐明慶知客上堂		龍67	○	＜妙性禅門妙端禅尼入牌＞	
72	永7	○	荐従原侍者頓写妙典上堂	（一一月）	龍68		＜総持開山忌拈香＞	
73	永8	○	竹庵貞禅師三十三周忌上堂		龍69	○	＜恵忍禅尼入牌＞	
74	永9	○	仏涅槃会上堂（四十九年血滴滴～）	二月一五日	龍70	龍2	＜正法寺入牌＞	
75	永10	○	上堂（現成公案大難大難～）		龍71	總Ⅰ24	＜定法禅門七年忌拈香＞	
76	永11	○	仏生日上堂（幽鳥喃喃～）	四月八日	龍72	永7	＜従原侍者年忌頓写妙典＞	
77	永12	○	結夏小参（恁麼時恁麼処～）	四月一五日	龍73		＜真良禅門忌日拈香＞	
78	永13	○	当日上堂（一塵具無量刹土～）	四月一五日	總Ⅱ1	總Ⅱ1・永26	嘉慶二年戊辰十一月二十七日進山（開堂）	一三八八年一一月二七日
79	永14	○	荐月叟義印上座上堂		總Ⅱ2	總Ⅱ21	小参（第一義諦諸仏心源～）	一三八八年一一月二七日
80	永15	○	五月旦上堂（青天怒雷～）	五月一日	總Ⅱ3		臘八上堂（臘月初八白雪漫漫～）	一二月八日
81	永16	○	端午上堂（今朝重午天中節～）	五月五日	總Ⅱ4	總Ⅱ2	臘月望上堂（南閻浮州～）	一二月一五日
82	永17	○	上堂（天雨朦朧～）		總Ⅱ5		除夜小参（芭蕉曰。汝有拄杖子～）	一二月三〇日
83	永18	○	上堂（一翳落眼空華乱墜～）		總Ⅱ6	總Ⅱ5	大簇月旦上堂（新歳年和～）	一月一日
84	永19	○	上堂（黄面老子六年間坐～）		總Ⅱ7	總Ⅱ6	元霄上堂（竪窮三際～）	一月一五日
85	永20	○	仏慈禅師忌辰上堂	八月一五日	總Ⅱ8		上堂（新年頭還有仏法否～）	（一月一日）
86	永21	○	上堂（劫前機肘後印～）		總Ⅱ9	總Ⅱ7	仏涅槃上堂（天蒼蒼地皇皇～）	二月一五日
87	永22	○	上堂（五五二十五～）		總Ⅱ10	總Ⅰ6	仏誕生上堂（覚体円満～）	四月八日
88	永23	○	上堂（芥子納須弥易～）		總Ⅱ11	永12	結夏小参（恁麼処是儞諸兄弟～）	四月一五日
89	永24	○	橋供養上堂（賀州能美郡安宅邑）		總Ⅱ12	總Ⅱ10・永21	同上堂（劫前機肘後印～）	四月一五日
90	永25	○	上堂（仏祖同根～）		總Ⅱ13	總Ⅰ8・永22	上堂（五五二十五～）	
91	永26	○	上堂（頂門眼～）		總Ⅱ14	總Ⅰ9	上堂（風光溢眼～）	
92	永27	○	荐宝真禅師上堂		總Ⅱ15	總Ⅰ9	端午上堂（古徳曰。以三世諸仏為頭～）	五月五日
93	永28	○	荐自宗監院上堂		總Ⅱ16	總Ⅰ10	上堂（想澄成国土～）	
94	龍1	○	至徳丙寅三年（龍泉寺開堂）	一三八六年	總Ⅱ17		上堂（画不成空劫真宗～）	
95	龍2	○	荐正法月泉良印和尚上堂	七月二三日（一説二月二四日）	總Ⅱ18	永19	上堂（黄面老子六年閑坐～）	
96	龍3	○	大山元公禅師忌斎上堂		總Ⅱ19	永2	上堂（天水混時～）	
97	龍4	○	総持先師峨山老和尚忌辰上堂	一〇月二〇日	總Ⅱ20	總Ⅰ12	半夏上堂（花愛惜散～）	六月一日
98	龍5	○	上堂（凌雲松柏万年枝～）	一〇月二一日	總Ⅱ21	總Ⅰ11	上堂（応時不触～）	

99	龍6	○	荐古心是耳大徳小参			
100	龍7	×	小参（金生麗水～）			
101	龍8	○	荐如還尼小参			
102	龍9	○	荐幻翁蔵司小参			
103						
104						
105						
106						
107						
108						
109						
110						
111						
112						
113						
114						
115						
116						
117						
118						
119						
120						
121						
122						
123						
124						
125						
126						
127						

總Ⅱ22			上堂（記得。龐居士曰。十方～）	
總Ⅱ23	總Ⅰ14		上堂（十五日已前白漫漫～）	
總Ⅱ24	總Ⅰ15		上堂（昨夜文殊普賢～）	
總Ⅱ25			上堂（拳。古徳曰。呑尽三世諸仏底人～）	
總Ⅱ26	總Ⅰ16		上堂（位裏転側～）	
總Ⅱ27	總Ⅰ17		上堂（門裏出身～）	
總Ⅱ28			解夏小参（古帆不掛～）	七月一五日
總Ⅱ29	總Ⅰ18		同上堂（無功妙旨～）	
總Ⅱ30	總Ⅰ19		上堂（釋迦前不出世～）	
總Ⅱ31	永11		仏誕生上堂（天蒼蒼日杲杲～）	四月八日
總Ⅱ32	永13		結夏小参（一塵具無量刹土～）	四月一五日
總Ⅱ33	總Ⅰ7		上堂（田地虚広～）	
總Ⅱ34			上堂（拳。文殊問無著～）	
總Ⅱ35	永17		上堂（天雨朦朧～）	
總Ⅱ36	永15		五月旦上堂（青天怒雷～）	五月一日
總Ⅱ37	永16		端午上堂（今朝端午節～）	五月五日
總Ⅱ38	總Ⅰ22		上堂（即心即仏～）	
總Ⅱ39	總Ⅱ11		上堂（霖露旬雨～）	
總Ⅱ40			上堂（古徳曰。人無心合道～）	
總Ⅱ41	總Ⅱ12・永23		上堂（芥子納須弥易～）	
總Ⅱ42	總Ⅱ15		半夏上堂（今朝半夏～）	六月一日
總Ⅱ43	總Ⅱ14		上堂（空劫真宗～）	
總Ⅱ44	總Ⅱ16		上堂（提住乾坤～）	
總Ⅱ45	總Ⅱ17		上堂（十五日已前心月孤円～）	
總Ⅱ46	總Ⅱ18		上堂（眼中物物中眼～）	
總Ⅱ47	總Ⅱ19		上堂（当位即妙不改本位～）	
總Ⅱ48	總Ⅱ20		解夏上堂（不求諸聖～）	七月一五日
總Ⅱ49	總Ⅰ2		峨山和尚廿五年忌陞座	一三九〇年一〇月二〇日
總Ⅱ50	總Ⅱ41		退院上堂	一三九〇年一〇月二一日